

## 漢字はなぜ誤解されているか？

では、この優れた機能を持つ漢字がなぜ今まで誤解され続けてきたのでしょうか。それは、欧米の学者たちが、漢字の研究や理解に十分でなく、ただ文字として最も古い形式である象形文字を今もそのままに持つ漢字を、時代遅れの旧式な文字だと考え、象形文字から派生したローマ字は当然それよりも進歩した文字だと、単純に考えたからです。

しかし、漢字を表意文字と呼び、それを表音文字よりも劣った文字だと考えることが大変な見当違いなのです。表意文字と呼べば、非表音文字だと考えられるのが自然です。事実、欧米の言語学者、例えばわが国で最もよく知られているイギリスのムーアハウスは、その著“文字の歴史”の中で、『文字は言語に関係なく作られ、両者の間には何の連鎖もなかった』と述べていて、最初の文字は物事を直接に表していて発音を表していなかったと指摘しています。このように非表音文字である表意文字から表音文字が派生した、と考えるので、これを発展だと見るわけです。

しかし、文字以前に言葉が存在していたのに、その言葉と無関係に文字が作られたと考えるのは不自然です。かりに、文字が言葉と無関係に作られたとしても、文字がその機能を果たするためには人々の共通理解が得られなければなりません。そのためには言葉と無関係で

どうして共通理解が得られると言うのでしょうか。それよりも、文字は最初から言葉を表すために作られたものと考えるのが自然だと思います。発生と同時に消えてしまう言葉を保存するために文字は発明されたのです。だから、漢字は表音文字でもあるわけです。表意と表音とを兼ね備えているので、“表語文字”と呼ばれるべきものです。

非表音の表意文字から表音文字が派生したのなら、これを文字の発展だと考えることができますが、表音文字でもある表語文字が単なる表音文字になったのを、発展と考えることは無理です。そこで、表語文字からなぜ表音文字が生れたか、その間の事情をよく考えてみる必要があると思います。

それは、文字を持たない後進民族が、先進民族の文字を借りてこれで自国語を表そうとする時に必然的に生れるものだということです。表語文字のもつ意味を捨てて発音を借りるか、反対に、発音を捨てて意味を借りるか、この二つのいずれかを選ばなくてはなりません。ところが、前者だと、自分たちが持つ音の数だけ(わが国では五十音、欧米では26のアルファベット)借りれば間に合いますが、後者だと最低二、三千字を必要とします。それで**必ず前者が採用され**<sup>1</sup>、表語文字


<sup>1</sup> (註1) Aは古くは𐤀で、牛の頭、角のある頭を象った象形文字で、  
“牛”という言葉を表した表語文字。牛という意味を捨ててアレフのア

が表音文字になるのです。だから、表音文字は表語文字の発展として出現したものではなくて、それ以外に方法がなくて、止むを得ず表音文字となったのです。

その証拠は、表音文字は表音を目的とせず表意を目的としていること、表音は表意の手段とされていることです。言葉の発音が変わると、発音と違ってしまった綴りを変えないでそのままその綴りを守っていることです。

例えば、one という英語の綴りは、16 世紀におけるオウニーという言葉の発音を忠実に表したものです。その後、英語では一般に語尾の e は発音されないようになり、従ってオウニーという言葉もオウンと発音されるようになりました。しかし、その発音を忠実に表す on という綴りには改められませんでした。文字は、何と発音される字であるかより何を意味する字であるかの方が重要ですから、発音を忠実に表す綴りに改めるよりも、従来の綴りを守った方がわかりやすいと考えたからです。今はさらにワンという発音に変わりました。それでも初めの one という綴りを守り won とは改めませんでした。

---

という音を借りた。B は  で、テントを二つ連ねた形で、“家”の象形文字。家という意味を捨ててブエートのブという音を借りた。アルファベットという名称は、このアレフとブエートを合せたアレフベートに由来する。あ(安の草書体)が、安の意味を捨ててアンのアという音を借りたのと全く同じ成り立ちである。

このように表音的でなくなった表音文字の用法を、ムーアハウスたち言語学者は“表音文字の墮落”と呼んでいます。それは、表音文字が表音を目的とする文字だと思い誤っているためです。表音は、表意の目的を達成させるための手段に過ぎないことがわかれば、それが墮落ではなくて発展であることが理解できると思います。

英語の so と sow と sew、 saw と soar と sore、これらは全く同じ発音の言葉ですが、発音に忠実な綴りは so だけで、あとは発音に忠実ではありません。しかし、忠実でないから意味が正しく伝達できるのです。このことは、欧米でもやっと最近になって理解できるようになったばかりです。『十数年前<sup>2</sup>までは、言語学者の 99 パーセントまでが、発音を忠実に表していない綴りを改めて発音通りの綴りにすべきだと考え、綴字法の改正を主張していた』のです。それで、わが国の学者もそう信じ、そう主張して来たのです。

結局、表語文字が文字の理想なのです。漢字が発明されてより以来、表語文字としての形態を変えないでいるのは当然なのです。中国が一時表音化を目指しましたが、結局それを放棄しました。これも当然のことです。表音文字は、自ら文字を創作できなかった民族が不便を承知で採用した代用品に過ぎないのです。

---

<sup>2</sup> (註2) アメリカの言語学者、ノアム・チョムスキーの言葉。朝日ジャーナル Vol.8 40 より